

朝を
ひらく永田 円了
真国寺住職

寺の一人息子の重庄から逃れるために、私は逃げた。遠くアメリカまで逃げた。自分の未来を誰かに決められることに対する反発だった。40年も前のことである。逃げお世話したつもりだったが、実は父の手のひらで右往左往していただけだった。その手の中で私は青春を謳歌した。

妥協を許さずゴールに向かって走ることに青春の情熱を感じていた。自分にはこんな可能性がある。こんなこともできる。頭の中は「問う自分」のエネルギーで満ちていた。

そんな夏の終わり、父は末期

人生の筋書き

がんの宣告をうけた。父69歳、私30歳のときだった。後継ぎの重庄が一挙にのしかかった。逃れたい！ 布団に横たわる父を前に、私の心は弾力性を失ったボールのようにこわばった。

思い切って言った。「寺の後継ぎはしたくない。僕には重すぎる」

こけた頬をやっと動かして、父は答えた。「円了、そんなきめきめに考えんでも……。お前

は、このお寺を基盤に伸びていけばいいがよ」

そうか、お寺の後を継ぐことは最終ゴールではなく、過程なんだ！ 瞬時に心の中に出口が生まれた。光が差し込んだ。父はその1週間後に息を引き取った。

あれから32年経った。この歳月は、私を「問う自分」から「問われる自分」に変えた。夢は何か、と問うた青春時代。そして今、「どんな夢をもつべきなのか」と、人生から問いかけられる自分。迷いながらも日々充実感がある。固定観念さえ捨てれば、伝統的でがんじがらめのように思えるお寺でも、おもしろいことがいろいろできる。

もしあの時、父との対話がなかったなら……。紙一重のことで変わる人生の筋書き。あの時感じていた重庄は何だったのか。今はこんなにも宝物なのに――。

今の自分のしていること、いや、自分がいま生きていること自体、奇跡のような気がする。アインシュタインが言った。「人生を生きるのに二つの方法しかない。一つは、まるで奇跡がないかのごとく、もう一つは、すべてが奇跡であるかのごとく生きること」

であるなら、これから起こることでもまた、今までの考えをはるかに超えた、思いもしないことが起こるかもしれない。だから人生は生きるに値するおもしろさがあるのだろうか。そして今度は同じように後継ぎの問題に直面している我が息子がいる。

生きることは面白い